第２分科会
自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、どのように保障しているか

② 分散会

Ⅰ．はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、子どもの変容、教職員の変容、地域の変容、これからの展望について４本の報告を軸に話し合った。また、２日間を通して「子どもたちが安心して生活できる集団づくりをどう進めていくのか」、「反差別の活動をどう組織していくのか」、「自分にとっての自主活動は何か」というテーマで討議、交流を進めた。

Ⅱ．報告および質疑討論の概要

ー報告１ー⑧

「集団づくり・自分づくり・授業づくり」で育む自己肯定感」　　（京都市人教）

－主な質疑と応答－

大阪　集団づくりで気を付けていることは何か。また、どのように子どもの自己認識の力を育てているのか。

報告者　まずは、「こんな力をつけてほしい」「こんなことができるようになってほしい」という思いや願いを教職員で話し合い、みんなで共有した。特に、学習活動の空間づくりや時間を守るなどの学習規律の部分は丁寧に取り組んだ。子どもたちの自己認識の力を育てるために、教職員側の子どもの見方を鍛えた。個別の見取りカードをつくり、毎日子どもの様子を記録するようにした。その結果、教職員が子どもの背景を知り、小さな変化に気づくようになり、それを丁寧に子どもたちに返していくようにした。

徳島　A の学校外の様子(トラブルなど)についてはどのように対応していったのか。

報告者　A の情報は地域の人からもたくさん入ってきた。そんなときは担任だけでなく、同じ学年部の教員で協力しながら話を聞き、学校全体で対処できるようにした。

大阪　A は自分のルーツについてどうとらえているのか。家庭とのかかわりはどうなっているのか。

報告者　A は母子家庭で母はブラジル人。A は自分のルーツについてはとても前向きにとらえている。自分のことについてよく話すし、自分のアイデンティティとして受け止めている。家庭とはなかなか連絡はとれないこともあるが、母子関係は良好である。集団づくりなど家庭ではできないことを学校が担っていこうと考えている。

大阪　A 以外に支援が必要な子はいないのか。また、A が変わったことによって、A の周りの生徒はどう変わったのか。

報告者　A だけでなく支援が必要な子が他にもいる。だからこそ、1 学期はどの課題のある子にも対応できるような汎用性のある取組を重視した。子どもたちが生活する上での土壌をきちんと整えた上で個別の課題に対応していった。A と個別に話すときは、クラスのほかの子にもきちんと説明して話す時間をとった。どんな話をしたか、どんな反応だったかもみんなで共有していったからこそ、A をみつめる周りの眼も温かいものになった。A も周りから受け止めてもらう中で変わろうと努力し、A の良さが集団の中でも発揮できるようになった。A をとりまく周りの環境をしっかり整えることを意識した。

奈良　もっとがんばりたいという向上心はどうやって育てていったのか。

報告者　まずは適切な目標設定。日ごろから適切な目標設定を意識し、自分の中でできることが増えてきたら、自然ともっとやってみたいと思う子が増えた。

ー報告２ー⑤

「みんなで乗り越えてほしい」～子どもたちが胸を張って生きる学びを～　　（鹿児島県人教）

－主な質疑と意見－

滋賀　隣保館と学校はどのように連携しているのか。

報告者　年に３回職員研修を行っている隣保館の職員が学校に来て話をしてもらっている。また、部落問題学習をするときには見に来てもらうし、隣保館の行事があるときには先生方も手伝いに行くようにしている。

滋賀　チャレンジ会はどのような活動をしているのか。対象は部落の子どもだけなのか。

報告者　チャレンジ会では、一人ひとりを大切にする仲間づくりの取り組みや補充学習を行っている。困難にぶつかったときに相談できたり支えあったりできるように仲間づくりに力を入れている。対象は部落の子だが、親が誘って来るようになった子や、クラスになじめない子や悩んでいる子が参加する場合もある。

徳島　報告者の「子どもを見守りましょう」という言葉が印象に残った。子どもを見守るときに気を付けていることは何か。

報告者　自分は最初は子どものことを信じることができなかった。しかし、ユウさんは子どものことをいつも信じてかかわっていた。ユウさんとかかわっていく中で、自分の子どもを見る目も変わって

いった。これまでの自分は子どもと同じ立ち位置にいたつもりになっていたが、そうではなかった。そのことに気づき、自分でも苦しくて変わりたいと思っていた。ゆうさんとの出会いの中で自分の中に変容があったからこそ、子どもをあたたかく見守るという考えにつながっていった。
大阪　自分の勤務している学校では、地域、小学校、中学校が連携して人権教育を一緒にやってきた。子どもたちの集団づくりを進め、ともに闘う仲間をつくっていくことも大切だが、一緒に子どもを育てていく大人もつながっていくことも必要だと思う。
報告者　学校地域がつながって子どもを育てていかなければいけないと思う。ちなみにケンタとは今でもつながっている。チャレンジ会では中学生も活動していて、高校生も時々やってくる。困ったときに相談できる人がいたり、学べる人がいたりすることはとても大事なことだと思う。

－報告３－⑦
「あなたは、どうする？」
～堺人研演劇交流会を通して～（大阪府人連）

－主な質疑と応答－
大阪　子どもたちから大人に向けた課題とは何なのか。
報告者　大人が子どもを守っていく、子どもを大切にするという視点をもつこと。演劇を通して教職員も課題意識をもってほしい。
鹿児島　演劇は学校の中で上演したりするのか。
報告者　A は学校の中でもやりたいという思いをもっていたが、B が自分はできないと言い、思い悩んでいた。周りの集団の意識を変えていく必要がある。課題のある子を支える子どもたちを育てていかなければならない。
大阪　演劇を通した A や B の成長はあるのか。
報告者　A は 3 学期に転校してしまい、部員は B 一人だけになってしまった。でも B は続けるといった。それが B の成長だと思った。現在は１年生が３人入部し、今年は B が脚本を書いた。学校での発表も考えたが、1 年生が難色を示した。その代わり、小学生の前で演じる機会があり、それはやりきることができた。
徳島　自主活動の取組は教員の準備も大切。準備をするときにどんな工夫をしているのか。
報告者　他の教員とも子どもの居場所を作るために一緒に取り組んでいきたいと考えている。まずは子どもの思いや表現したいことを大事にしている。こちらから押し付けるのではなく子どもたちの思いをどのように形にするかという点を意識している。
大阪　子どもたちに「自分のことを表現したい」という思いをもたせるためにはどうしたらいいのか。
報告者　できるかぎり子どもたちがチャレンジできる場をつくっていくこと。どうやったらやりたいことをやらせてあげられるかということを考えている。
大阪　なぜ演劇という方法をとったのか。
大阪　堺では、1977年から演劇交流会が行われている。差別を許さない見逃さない、そんな仲間づくりの一つの方法として演劇を行ってきた歴史がある。演劇を通して、そこが子どもの居場所になるようにしている。

－報告４－⑥
生徒の思いや活動と、人と人とがつながるということ　（徳島県人教）

－主な質疑と意見－
大阪　相手を認め合う、大切にする集団をつくるためにどんな取組をしているのか。
報告者　まずは授業を頑張っている。授業の中で力をつけていくことが大切。つけたい力を明確にして子どもたちに示している。
福岡　学校と地域とのつながりをどうつくっているのか。
報告者　もともと学校と地域につながりがあり、今はそれを維持しながら少しずつ広げている。子どもたちが地域の人と出会い、その出会いの中で新しいつながりができることがある。
徳島　地域の人々の願いをどのように活動に生かしていくか。
報告者　子どもたちも最初は明確な目的をもって活動していたわけではない。実際に地域の人とかかわり一緒に活動することでやりたいことが明確になっていった。私たちの思いとしては、まずは体験することで地域の人の苦労や工夫を知ってほしいと思った。
滋賀　子どもたちの悩みについての話が出たが、どんな悩みなのか。
報告者　学校に来づらい生徒もいる。話しても原因がわからない。しいて言えば「お腹がいたい」「お腹が鳴るのが気になる」などの理由を語ってくれた。そんな時、その子の問題を軽視せず、その子にとっては真剣な悩みなんだというように受け止めるようにしている。1 人の教員だけではなく、複数の教員で支えていくことを意識している。

Ⅲ．総括討論およびまとめ
滋賀　自己肯定感を高めることは自分の県でも課題となっている。自己肯定感を高める実践を進めていきたいと思う。また、我々自身が子どもたちにとっての居場所になれるようにしたい。子どもたちが活躍できる場をしっかりつくっていきたい。
滋賀　今、教員はとても忙しい。だからこそ学校で一緒に頑張れる仲間を作ってほしい。こまぎれの

時間でもいいから生徒の話を聞く時間を確保していきたい。
滋賀　全人教で学んだことを他の仲間に伝えていくことも一緒に頑張れる仲間をつくることにつながると思った。
大阪　やはり子どもたちのしんどさに向き合っていかなければならないと感じた。子どもたちのかすかな変化に気づけるか、そこが勝負所。
大阪　自主活動をつくっていくときに、子どもたちの自主活動が新しい子どもたちの自主活動につながることがあった。人との出会いが自主活動を進めるきっかけになることもある。だからこそ、色々な人と出会う仕掛けをつくっていくといいと思う。
大阪　子どもたちが自分の思いを伝えていく場は必要だと思う。差別を自分の問題として捉えさせ、すべての人が差別をなくそうと思って連帯していくことが大切。個人の思いやりではなく、差別を生んでいる社会の集団意識を変える動きにしていきたい。
鹿児島　仲間づくりを教室の中で実践していくときに違いを認めることが大切だと思っている。違いを認めるためには違いに気づく必要がある。悩んでいる相手のことを考えていくから人の気持ちを考えられるようになる。そういう状態になっていくと人と人とのあたたかいつながりが生まれていく。
徳島　活動を長く続けていくためには、自分たちの活動が認められ、安心して活動できる場になっていることが大切である。
京都　安心できる居場所をつくるために自分が意識していることは、たとえうまくいかないことがあっても、その過程をきちんと評価し、「ここがんばったね。」「ここを意識してるね。」という視点で子どもの活動に励ましの言葉をかけられるかどうかだと思う。自分のことをちゃんと見てくれている、分かってくれているという安心感が子どもたちの居場所を作るために大切だと思う。
大阪　子どもの居場所、自主活動の場を常に設定していかなければならない。子どもが生き生きと活動できる場は必要である。その中で自分の課題にも向き合って、そこからまた成長がある。子どもを見守りながらそんな場をつくりたい。
大阪　自主活動はすごく大切。居場所があるから自己肯定感が高まっていく。自主活動は子どもに居場所と出番を与えるもの。出番があってやりきった経験は必ず成長につながる。
大阪　自主活動が反差別の集団づくりという意識を今まで自分はもてていなかった。今回の報告や総括での話はとても勉強になった。
報告者　出会いがとても大切だと思う。一人でやらず、みんなを巻き込んで楽しい活動をつくっていきたい。
報告者　子どもたちの中にある差別心ともしっかり向き合わせていきたい。大人の差別意識や無意識の偏見が子どもの差別心につながることがあるので、自分の差別心ともしっかり向き合っていきたい。
報告者　この大会で自主活動の意義を立ち止まって考えることができた。生徒の頑張りは私たちの頑張りにつながる。生徒に自分が助けられていることも今回よく分かった。立ち止まって考えることの大切さを学んだ。

Ⅳ．おわりに

「自主活動」分科会では、部落差別をはじめとする様々な人権課題の問題解決をめざして、子どもたちがくらしを見つめ、語り合い、支えあう仲間集団づくりを軸に自主的な活動の取り組みをしてきた。そして、どのように保障してきたかをテーマに掲げてきた。その中で子どもたちの立ち上がりや未来を切り拓く力を、自分の生き方へとつなぐ取組の創造の大切さを確認し合うと共に、私たち自身の「自主活動」を問い直し、自分の立ち位置を明らかにすることを問い続けてきた。今大会においても4本のレポートから、職場や地域で人とどうつながっているのか、地元の人権課題にどれだけ学んでいるのか、目の前の子どもたちに仲間のどんな生活を伝え、共有させているのか、そしてそのことを反差別の人権学習としてどう構築しようとしているのか、ということが問いかけられた。報告には、実践者と子どもたち、保護者、地域などとの「確かな出会い」があった。その出会いから「人と人との確かなつながり」が築かれていた。「つながり」の中で、実践者が自身と向き合い変容していく姿があった。

2日間を通して、「子どもたちが安心できる居場所をどうつくるか」「子どもたち同士のかかわりをどう深めていくのか」「子どもを育てていくために周囲の大人、地域がどうつながっていくのか」「地域と子どもたちをどうつなげていくか」「反差別の活動をどうつくっていくのか」ということが話題にのぼった。差別を見逃さない、許さない、そんな思いの仲間をつくり、差別の現実から学び、実践をつくっていく、そんな取組が地域を社会を変えていくことにつながるのだと考えた。日々の生活の中で苦しい思いをしている子がいる。その子たちの思いに寄り添い、支えていく自主活動がそんな子たちの居場所になっているということも確認された。

今大会で得たエネルギーを、そして課題を各地に持ち帰り、「差別をなくす当事者」として何ができるか、以前の大会宣言にもあった「かけがえのない私がありのままに生きていける」社会をつくるために何ができるのかを考え、次の実践につなげていきたい。